

研究タイトル：

容認性判断に「揺れ」が生じる日英語の言語事象に関する認知言語学的研究


氏名： 森 貞 / MORI Sadashi

E-mail： mori@fukui-nct.ac.jp

職名： 教授

学位： 博士(文学)

所属学会・協会：

日本英語学会, 日本言語学会, 日本英語表現学会, 日本認知言語学会, 日本語用論学会, 大阪大学英文学会, 金沢大学英文学会

キーワード：

容認性判断、英語、日本語、文法、語法、認知言語学

技術相談
提供可能技術：

- ・日英認知モードの違いを意識した英文作成についての講演
- ・日英認知モードの違いを意識した英会話力養成についての講演
- ・日英語の語法・文法についての講演

研究内容：
【研究の概要】

文法には、大別して、規範文法(学校文法)と記述文法がある。また、近年の認知言語学的アプローチによる言語研究の隆盛により、rule-based から usage-based(これ自体は目新しいものではないが)への言語観(言語に対するアプローチ)への転換に基づく言語事象の研究が行われるようになってきている。これに連動して、(任意の)言語事象に対する容認性判断に「揺れ」が生じる可能性は十分にあるということが当然の帰結として捉えられるようになってきている。

本研究では、この「揺れ」が生じる認知的要因を具体的な言語事象に関する容認性判断の言語感覚調査(インターネットにおける言語フォーラムでの問いかけを含む)やインターネット上に公開されている大規模コーパス(データベース)等の KWIC 検索(音声解析を含む)を通して明らかにすることを目的とする。

【研究の核心】

従来の言語研究においては、言語研究者の内省(容認性判断)に基づき、非文とそうでない文の観察を通して、任意の言語事象の生成に関わるルール(規則)の同定が行われていたが、同一の言語事象に対して、母語話者の言語学者間においてさえ容認性判断に大きな差異(容認可能と判断する言語学者が存在する一方で容認不可能と判断する言語学者が存在すること)が認められる先行研究が存在することや、近年の大規模データベースを用いた言語研究(コーパス言語学)の隆盛により、任意の言語事象の容認性判断に「揺れ」が存在することが明らかになっている。

したがって、この容認性判断の「揺れ」を生じさせている要因を明らかにすることが、言語事実の解明には不可欠であり、「(任意の)言語事象の容認性判断に「揺れ」を生じさせている(認知的な)要因は何であるか？」という問いに答えることが本研究の核心である。

【研究対象となる具体的な言語事象】
日本語

- ・疑問詞と「かどうか」の共起
- ・いわゆる NR 述語(e.g. 「思う」)を主節述語とする従属節中の強 NPI(e.g. 「だれも」「しか」「まで」etc.)の認可
- ・「なぜ」を含む多重疑問詞疑問文
- ・複合動詞(V1+V2)の受身形(二重受け身表現を含む)と英語の相当表現

英語

- ・I don't [think / believe / know that] ーp. [function: weak assertion of ーp]
- ・S know whether P
- ・'as opposed to' の等位接続詞的用法